

アメリカの大学の学生寮視察調査

—本学の学生寮への提案—

The investigation of dormitories at American universities:
A proposal to dormitories of Ochanomizu University

赤坂瑠以 (Rui AKASAKA)

お茶の水女子大学 学生支援センター

はじめに

近年、日本の大学の学生寮は、急速に変化してきている。かつては主流だった 2,3 人部屋などの相部屋が減り、代わって今日では、個室タイプの寮が増加している傾向がある。また、各部屋にはユニットバスやトイレが備えられ、インターネットの完備、24 時間体制の警備など、サービスも多様化している。

このような学生寮の変化は、主に学生のニーズに基づいて進められてきたが、その反面、寮生同士の関わりが希薄化し、寮生の自治機能も低下していることが指摘されている(大友, 2002)。かつては自治組織をもっていた学生寮も、自治組織の形骸化が進む中で、徐々に自治寮を廃止し、大学及び管理委託会社によって運営されている寮も多い。このような学生寮の変化の中で、時代の変化を踏まえつつも、寮生が他者と生活を共にすることを通じて、視野を広げ、様々な学びを体験していくことは、今日でも学生寮のもつ重要な機能の一つと考えられる。

日本の大学の学生寮は、古くから費用の安さを保証し、遠方出身の学生に、寝食の場を安価に与えることで、大学で学ぶ機会を提供することを第一義とされてきた。一方、アメリカの大学の学生寮は、寝食の場としてとらえるだけでなく、学生寮だからこそ実現できる教育的機能を重視して、様々な形態や機能を発展させてきた。そこでの取り組みは、日本の学生寮の参考になる部分も多く、とりわけ、学生寮の個室化が進む今日では、学生寮での寮生同士、寮生と教員との関わりがもつ意義は大きい。

そこで、本調査論文では、アメリカの大学の学生寮を視察した結果をまとめ、交流を通しての学びの場としての機能を明らかにし、お茶の水女子大学の学生寮、とりわけ、新寮の「お茶大 SCC」での取り組みの参考とする知見を得ることを目的とする。

お茶の水女子大学の学生寮

まず、お茶の水女子大学の学生寮の概要について述べる。

お茶の水女子大学には、2 つの既存寮があり、1 つは、学部学生及び留学生を対象とした「国際学生宿舎」(定員 400 名、自治寮)であり、もう一つは、大学院生を対象とした「小石川寮」(定員 80 名、自治寮)である。これらの寮に加え、2011 年に、学部 1,2 年生を対象とした「お茶大 SCC」(定員 50 名)が建設され、入寮が開始される。

お茶大 SCC は、2 つの既存寮と異なり、自治寮ではなく、大学が運営・管理を行う。また、「ハウス」制を採用しており、5 人で 1 つの「ハウス」を形成する。これは、欧米などでは一般的に見られる学生寮の居住形態で、複数人で 1 つのコミュニティ(ハウス)を形成し、ハウスでの助け合いを通じて、共に成長し合うことを目指している。

また、お茶大 SCC では、ハウスを中心として、様々な取り組みを行う「学習支援プログラム」が設定されている。このプログラムは、他者との交流やコミュニケーションを通して、豊かな人間関係をはぐくみ、学び合うことをコンセプトとするもので、具体的には、1) 寮生同士の交流を促進させるための「交流プログラム」、2) 寮生自身が主体的に活動し、学び合うための「自主企画」、3) 大学とは異なる寮独自の学びの場である「学修プログラム」の 3 つを柱としている。そして、これらの様々な活動・交流を通して、他者と助け合いながら、主体性・自立性をもった人格を養うことを目指した支援を行っていく。

これらの取り組みは、寮生同士や、寮生と大学の教職員との交流を活性化させ、寮独自の学びを実現できる可能性があるが、日本ではこれらの取り組みを、寮生と大学とが連携して行っている事例はあまり多くない。そこで、本調査論文では、これらの取り組みを先駆的に実践している欧米諸国の大学、とりわけ、寮を大学の教育活動の一環と位置づけ、大学の教職員が積

極的に働きかけを行っているアメリカの大学を視察し、それぞれの大学で、どのような寮の運営が行われているかを検討する。

本調査論文の構成は以下のとおりである。

第 1 章においては、本調査の概要とその趣旨、目的について述べる。特に、お茶大 SCC の学生寮の意義や取り組みとの関連から、本調査の意義を示す。第 2 章においては、本海外調査で訪問した昭和女子大学ボストン校、ハーバード大学、マサチューセッツ工科大学、ボストン大学の 4 つの学生寮の現状とその特徴を、大学ごとに概観する。特に、「学生寮の概要について」、「寮生同士・寮生と大学との交流や活動について」の 2 点に焦点をあて、具体的な画像や資料を交えながら、各大学の取り組みやその成果について報告する。

第 3 章においては、これらの調査結果を踏まえ、アメリカの大学の学生寮と比較して、日本の学生寮としてのお茶の水女子大学の寮、とりわけお茶大 SCC の在り方についての考察を行い、今後取り組むべき課

題について考察する。

海外視察調査

(1) 昭和女子大学ボストン校

1) 寮の概要

昭和女子大学ボストン校(昭和ボストン)及び学生寮は、1988 年に設立され、現在、40 人が入居可能な寮棟が 10 棟、大学キャンパスに併設して運営されている。この寮は、主に日本人留学生(ほとんどが昭和女子大学生)を受け入れており、留学生がアメリカで生活し、アメリカの文化に触れる機会を提供することを目的として運営されている。日本人留学生は、主に学部 1,2 年生で、5 ヶ月から 1 年 6 ヶ月の留学プログラムで訪れる。各寮室は、2 人 1 部屋を基本とし(一部 4 人部屋もある)、食事も提供される。また、寮は、大学の図書室や教室につながっている他、寮全体での共有施設として、フィットネス・ルーム、ゲーム・ルーム、屋内プール、ヘルスルームなどがある。また、



Figure 1 昭和女子大学ボストン校の学生寮

各寮棟での共有施設として、共有ラウンジ、トイレ・バスルーム、ランドリー・ルーム、キッチンなどがある (Figure 1)。

2) 寮での交流や活動

寮の運営は、8名の大学のスタッフが担当している他、レジデント・アシスタント (RA) が、各棟に2人ずつ住み込みで滞在している。RAは、ボストン在住の大学院生や社会人などで、昼間は通学・通勤をしながら、スタッフが不在となる夜や週末に、ボストンの生活や情報、イベントの企画などをして、昭和ボストンの日本人留学生のための日常的なサポートを行っている。また、RAは、ニューイヤー・イブ・パーティ、ハロウィン・パーティなどのアメリカの伝統的なイベントを企画したり、ボストン市内の観光名所等に日本人留学生を連れ出して、案内したりする。

寮生同士の交流や活動としては、日本人留学生が滞在中に、棟の全員で参加する企画 (寮祭等) をして、棟全体での共同作業の機会を作っている。この活動によって、連帯感や達成感を学び、その後の留学生在活が、より活性化すると述べられていた。その他にも、ボラ

ンティア活動も盛んで、地域との連携のもと、老人ホームや小学校で日本文化を紹介したりする交流も行われている。また、各棟には、日本人留学生のリーダーと副リーダーが2名いて、様々なイベントや共同作業を通じて、リーダーシップを育てていくことも重要であると述べられていた。また、寮内で何か問題が発生した場合は、寮生同士で話し合っ解決させることを基本としており、それによって、仲間意識や問題解決の方法を学ばせていくと述べられていた。

(2) ハーバード大学

1) 寮の概要

学部学生は全寮制であり、ほとんどがハーバードヤードと呼ばれる学内の寮 (On-campus housing) に住んでいる。

寮は各自希望で選択することが出来、人気がある寮は抽選となる。寮は1人部屋から4人部屋 (ルームメイトとの相部屋) などの様々なタイプがあり、食事付き・食事なしなどの条件も選択できる。寮費は部屋によって異なるが、1学期で約40～55万円程度のものが中心である。全ての学生寮は大学の生活支援課



Figure 2 ハーバード大学の学生寮



Figure 3 マサチューセッツ工科大学の学生寮

(Harvard real estate service) が管理運営している (Figure 2)。

2) 寮での交流や活動

ハーバード大学では、学内で様々なイベントが催されており、多くの寮は学内にあるため、取り立てて寮に限定したイベント等は行われていない。ただし、学内の寮では、寮生が個人個人で主体的にイベントを企画したり、参加したりすることがあり、寮にもよるが、寮内での交流は概ね行われている。また、上級生と下級生の交流も特別に企画されてはいないものの、寮生が集まる食堂で、授業の課題について教え合ったり、就職や進学の相談をしたり等、日常的に関わりをもち、助け合っている。また、ハウス制を採用している寮では、共同生活上で問題が生じることもあるが、ほとんどの場合は当事者同士がよく話し合っ、問題を解決していると述べられていた。

大学からの特別な働きかけがなくても、このような交流が自発的に行われる理由として、一つには、学生が自立を目指し、寮でも主体的に生活する姿勢をもっていることが挙げられる。自宅からの通学距離の関係もあるが、アメリカでは、大学生になると親元から離れて寮で生活することが一般的である。そのため、学生も寮生活を通じて、自立していく意欲をもっており、寮内で、何か問題が起こった場合には、自分たちの責任として捉え、できるだけ当事者同士が話し合っ、問題解決するという意識を持っていると述べられていた。

(3) マサチューセッツ工科大学

1) 寮の概要

学部学生用に 12 の寮棟があり、1918 年に建てられた古い寮から 2008 年に建てられた新しい寮まで、

様々なタイプ・外観の寮が点在している。学部学生の 74% は、学内の寮に住んでいる。寮のタイプとしては、1 人部屋から 4 人部屋などがあり、食事なし・食事付きなどの条件の選択もできる。寮費は様々だが、1 学期で 40 ～ 50 万円程度のものが中心である。寮内には、共有施設として、フィットネス・ルーム、ゲーム・ルーム、コンビニエンスストア、ミーティング・ルーム、学習・パソコンルーム、視聴覚ルームなどがある (Figure 3)。

また、大学院生の寮は、単身寮のほか、大学院生には既婚者も多くいる為、家族で住めるアパート形式の寮もあり、子どものプレイルームや遊戯施設も充実している。

全ての学生寮は大学の学生寮課 (Housing office) が管理運営している。

2) 寮での交流や活動

マサチューセッツ工科大学の学生寮では、全ての寮に共通して、「住居プログラム (Residential life programs)」が組まれている。これは、大学の関係者がチームを組み、連携して寮生をサポートするシステムである。プログラムの一番上層には教授が置かれ、各寮に 1 人の教授が家族とともに住み、寮生の学習面や心身面でのサポートを統括的に行う。その下層に GRT(Graduate resident tutors) が置かれ、これは大学院生 1 名が 35-40 名の学部生を担当し、相談相手となって、サポートを行うシステムである。さらに、RLA(Residential life associate) が置かれ、寮生の夜間の対応や教育的プログラムの企画 (一例として、エンジニアを招待した講演パーティや、僧侶を招いて、仏教についての講演や実演を行う等) などを行う。また、教育的プログラムだけでなく、各寮で寮生が主催するイベント、ゲーム、エクササイズなども豊富にあ

る。教育的プログラムでも、寮生主催のイベントでも、重要なことは、企画のバラエティを多くして、寮生の興味や関心を広げ、将来の可能性を広げることであり、そのために、全てのスタッフが、寮生がどんなことに興味をもっているかを常に考え、様々な企画を工夫していると述べられていた。

また、入寮時には、段階的な細かいプロセスがある (Figure 4)。初めに、CPW(Campus preview weekend) が設けられており、新入生はこの期間の3日間、実際に寮で暮らし、どの寮に入寮したいかを検討する。CPWの期間は、各寮で様々なイベントが行われ、寮生はそれらに参加し、さらに、全ての寮が紹介された寮ガイドを見て、入寮を判断する。そして、入寮したい寮を決定した後、3日間のオリエンテーションが行われ、この期間に、希望した寮で生活してみて、本当にこの寮でいいかを再確認し、その後、入寮の最終決定となる。入寮が決まったら、寮生のリーダーと相談して、フロア、居室などを自分たちで決める。このように、入寮までに細かいプロセスがあるが、これは、寮ごとに独自の文化があり、どの寮が自分に合っているのかを時間をかけて考えさせることで、入寮後の問題や不満を減らし、寮生活を満足させるための工夫であると述べられていた。

さらに、寮内での寮生同士の関わりは、日常的に活発である。上述したイベントの企画等や、寮生同士のサポートも日常的に行われている。寮生同士が助け合い、異なる価値観や個性に触れながら、ともに成長していくことが寮生活の目的であると述べられていた。特に、上級生と下級生の関わりは重要と考えられ、どの寮でも、異なる学年や学部が混ざって生活しており、上級生は、下級生の学習、心身、生活態度など、大学生活全般のサポートをするよう、大学からも働きかけていると述べられていた。また、寮間でも交流の機会が設けられており、年に数回、寮のリーダーが集まってミーティングを開き、各寮のイベントや寮での取り組みを話し合っている。

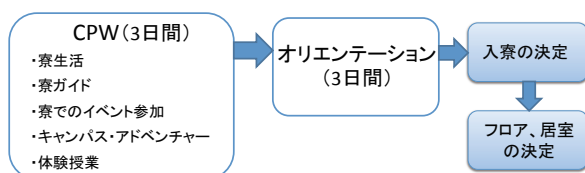


Figure 4 入寮までのプロセス

(4) ボストン大学

1) 寮の概要

ボストン大学には、学部学生約 16000 名、大学院生約 8000 名が在籍しており、そのうち、学内の寮で学部生の約 11500 名、大学院生の約 800 名が生活している。寮棟は、大小様々なものが 147 棟ある。寮は各自希望で選択することが出来、1 人部屋や 4 人～6 人部屋など様々なタイプがあり、食事なし・食事付きなどの条件の選択もできる。寮費は様々だが、1 学期で 45～55 万円程度のものが中心である。共有施設として、ゲーム・ルーム、コンビニエンスストア、カフェテリア、ミーティング・ルーム、学習・パソコンルーム、視聴覚ルームなどがある (Figure 5)。また、学生の生活する地区 (Student village) には、学生が自由に使える大型のスポーツセンターも併設されており、温水プール、トレーニングジム、ロック・クライミング、屋内テニスコートなども完備されている。

2) 寮での交流や活動

寮の運営は、大学スタッフが各寮に配置されて行っている他、レジデント・アシスタント (RA) が各棟にいる。RA は上級生や大学院生などが担当しており、寮生の第一の接触先として、下級生の寮生のサポートを行っている。それでも解決できない問題があった場合は、ディレクターや学内の寮に住んでいる教授が対応することもある。ただし、ボストン大学では、キャンパス・ポリシーとして、学生の責任を重視しており、厳格な規律がある。寮の運営も、このキャンパス・ポリシーに則して行われているため、何か問題が発生した場合は、できるだけ自分たちの責任として、寮生自身で解決していくように促していると述べられていた。特に複数人で暮らすユニットタイプの寮では、対人関係の問題が生じやすいが、その場合も、学生自らが、寮生活で他人と共同で住む意味を考え、他者と関わりながら問題解決をするよう、教育していると述べられていた。

また、寮での交流として、毎月多数のイベントが行われており、学内にイベントを企画するための部署 (Student activity) が設けられている。SA は学生と共同して企画を立て、学生の興味を引くイベントを製作している。一例として、スポーツイベント、文化交流のイベントなどの他、外部の著名人を招いた弁論大会などの教育的なイベントも多く行っている。これらのイベントに学生を惹きつける工夫として、「寮生を惹きつけるような広告を行い、どんなパッケージにする



Figure 5 ボストン大学の学生寮

かを工夫している。独創的だったり、時事に関連したものなどは、学生の関心を集めやすく、よく行われる。このように、寮生のモチベーションを高めるしかけを常に考えている」と述べられていた。また、教育的なイベントは、単なる講義にせず、例えば、コミュニティサービスに結び付け、単位の取得や謝金などの対価を与えることで、自身の関心のあるコミュニティサービスが選択でき、対価が得られるなどの工夫をしていると述べていた。

日米の学生寮の比較及び、今後の課題

本章では、視察した4つの大学の学生寮に見られた特徴をまとめ、それを踏まえて、今後、本学の学生寮の運営において課題と考えられる点を挙げる。

1点目として、アメリカの学生寮では、大学の教職員及びRA等の専門スタッフが、寮の運営や取り組みに積極的に関わっていることが挙げられる。特に、マサチューセッツ工科大学、ボストン大学等では、教授が寮に住み込むことにより、教育面、生活面でのサポートを行うと同時に、寮生の責任感や自立を促す働きかけを続けていくなど、寮生活が人格形成にも重要な役割を担うものと考えられていることがうかがえた。このように、アメリカの学生寮は、「生活の場であると同時に教育の場」と考えられて運営されており、教育

的機能を併せもっていることが示唆された。

本学に翻ってみると、これまで本学の学生寮には、職員等のスタッフは配置されていたが、教員と学生との関わりはほとんどもたれず、教員と連携した教育的活動もほとんどなかったといえる。このことを踏まえ、お茶大SCCでは、「学修プログラム」を行うことで、本学の教員が寮生と教育的関わりを持つ機会が設けられている。また、教員が学寮アドバイザーとして寮に関わることで、寮生の支援のニーズを把握しやすくなり、寮生の教育面、生活面でのサポートを拡充していくことができるのではないかと考えられる。ただし、お茶大SCC以外の2つの既存寮では、そうした取り組みは行われていないため、今後は、お茶大SCCでの取り組みを踏まえて、他の寮でも、それぞれの寮の機能に応じた支援プログラムを作り、寮生のニーズにあわせた支援や、教育的機能の向上を図っていくことが課題と考えられる。

さらに、2点目として、アメリカの学生寮では、寮生同士の交流が重視されており、特に上級生が下級生のサポートをすることで、お互いが成長し合うことが目指されている点が挙げられる。下級生にとって、上級生は、寮の仲間でもあるため、上述した大学のスタッフより接触しやすく、サポートも受けやすいという利点がある。お茶大SCCでも、こうした利点を生かす取り組みとして、ハウスには、1年生と2年生を混

ぜて入居させ、2年生が1年生のサポートをしつつ、相互の交流の中で、お互いがともに成長し合うことを目指している。ただし、お茶大 SCC には学部 1,2 年生しかいないため、さらに上級生の学部 3,4 年生や大学院生との関わりをもつことが難しい。したがって、今後は、学部 3,4 年生の住む国際学生宿舎や、大学院生の住む小石川寮との連携を図り、寮生同士のより広いサポート体制の枠組みを構築していくことが課題と考えられる。

3 点目として、アメリカの学生寮では、寮生と教職員が連携してイベント等を企画・運営していることが挙げられる。また、イベントは娯乐的なものばかりではなく、弁論大会、異文化交流等の教育的イベントや、スポーツ大会等、多様なものが実施されている。このように、多様なイベントを実施し、間口を広くすることで、寮生が自分の興味の持てるイベントに参加できるようにし、様々な活動を通して、生活を充実させると同時に、新たなチャレンジを通して、将来の選択肢を増やすことが可能となるものと考えられる。

本学では、これまでは、教職員と学生とが連携してイベントを企画することはなく、寮生が主体的に実施しているウェルカムパーティなどのイベントを除いて、イベント自体もほとんど実施されていなかった。このことを踏まえ、お茶大 SCC では、学生支援プログラムを通じて、様々な種類のイベントを企画しており、学生が自主的に行うイベントだけでなく、教職員が主体となって企画するイベントも実施される予定である。ただし、これらのプログラムは、現時点では体

系的に整備されているとはいえないため、今後は、プログラムの目的に応じて、イベントを体系立てて行っていくことが必要と考えられる。また、ボストン大学でのヒアリングでも述べられていたように、教育的なイベントは、硬い内容になりやすく、それでは寮生も参加したがないため、寮生の興味を引く工夫が必要と考えられる。したがって、今後は本学でも、そのような仕掛けや広告方法なども改善し、寮生がモチベーションをもって企画、参加できるようなイベントにしていく必要があると考えられる。

以上をまとめると、本調査では、アメリカの大学の学生寮を視察した結果、教員と寮生徒との交流、寮生同士の交流が積極的に行われており、大学内での連携が図られていることがうかがわれた。また、このような連携の中で、多様なイベントが学内や寮内で頻繁に行われており、寮生活全般が、寮生にとっての学びの場として機能していることが示唆された。今日、日本の学生寮の個室化が進む中で、寮生同士の関わりが減少する可能性が指摘されているが、こうしたアメリカの学生寮の取り組みから、寮の機能を見直し、新たな可能性が提言された点に意義があると考えられる。

参考文献

大友章司 (2002) 『廃棄行動における集団成員性と集団利益との関連 - 学生寮のごみ問題の現場研究 -』愛知教育大学 教育学部卒業論文。

2011 年 2 月 11 日 受稿